學界展望

經濟戰爭の本質とその變容

赤松要

一

『武器の發達は戰爭を否定する』と世界大戰後に言ひ出された。四ケ年半つゞいた世界大戰は七百三十萬人の戰死者、二千萬人の負傷者を出し、四千億圓の戰費を費して、歐洲の大陸に慘憺たる戰禍を殘したのである。これ以上に武器が發達した場合に果して歐洲の諸國間に戰爭が可能であらうか、とは誰しも考へるところであつた。然るに意外にも再び歐洲を中心として戰亂が捲きおこつた。現下の歐洲戰爭は、いまこれを書く日、突如として北歐諸國に擴がり、大きな武力的會戰の前夜たるを思はしめる。しかし、今日までジーグフリード線とマヂノ線とは對峙して戰はず、双方の空軍もまた敵の首都を襲はない。武器の發達は確かに戰爭の發展を重壓してゐる。これは戰爭の主要形態を武

力戰爭から經濟戰爭に移行せしめた大きな原因であらう。

前の世界大戰においても經濟戰爭は極めて重要な役割をなした。特にドイツにとつては、一歩も敵を國内に侵入せしめることなく、しかも敗戰にいたつたことは『經濟戰爭、飢餓戰爭における勝利が決定的であつた』(A. Dix, Wirtschaftskrieg und Kriegwirtschaft, S. 1) ためである。しかし、前の世界大戰の主たる戰爭形態はやはり、武力戰爭であり、これを援護する第二義的意味において經濟戰爭が戰はれた。即ち聯合軍によるドイツの經濟封鎖、ドイツによる潛艦作戰などは武力の援護による經濟戰爭の形態に外ならぬ。

曾つてナポレオンはイギリスを經濟封鎖するために大陸封鎖令を出した。これは紙上封鎖に終つたが明かに經濟戰爭の形態である。しかるに、今日においてイギリスは大陸を經濟封鎖せんとしつゝある。しかも、今度の歐洲戰爭では經濟戰爭が戰爭の主要形態であり、武力戰爭は今日までのところ、單に經濟戰爭を援護する手段であるかの觀を呈してゐる。イギリスの海軍はドイツ海軍を擊破するためにあるといふよりも、敵性商船を拿捕するために存在してゐると言はれる。ドイツの潛艦戰もまた主としてイギリスの海上交通を遮斷するにあつた。ドイツのチェッコ、ポーランド侵略も、獨ソ協定も、北歐進駐もともに、イギリスの經濟封鎖を無效ならしめんとする經濟戰爭の形態であると言へる。從つて北歐において武力戰が展開さるゝとすれば、それは經濟戰爭が喚び起した副次的武力戰爭たるものである。

武力による速戰即決の戰爭時代は過ぎた。それは武器の發達がこれを作り出した人類にあまりに多くの犧牲を要求することに一つの重要な原因がある。長期戰爭は即ち經濟戰爭たらざるを得ない。武力は如何にしてこの經濟戰爭を

よく遂行せしめるかの第二次的任務を負ふことゝなつた。かやうな戰爭形態の變遷は經濟戰爭の研究の重要性を加重しきたつてゐる。前の世界大戰においてドイツは最も痛切に經濟戰爭の問題を自覺し、今度の戰爭に備へたのである。イギリスも『經濟戰爭省』を設けて現下の戰爭に最も大きな役割をなしつゝある。

いま經濟戰爭の文獻若干を通覽するに當つて、國際公法上の問題を詮索することは筆者の任ではない。こゝには主として經濟戰爭とその地盤をなす世界經濟との關係を觀察するにとゞめる。一方、上杉謙信が武田信玄に鹽を贈つて武力の決戰を試みんとした戰爭形態に對して、他方に敵の糧道を斷つことによつて戰はずして勝たんとする經濟戰爭を對比し、益々かゝる戰爭形態が戰爭の主要部分を構成するにいたりつゝあることを主題とするのである。

二

世界大戰が十六ケ月を經過した時に出版されたI. Plenge, Der Krieg und die Volkswirtschaft, 1915. は最も强く世界大戰を經濟戰爭として自覺せるものと言へる。『かつて戰爭が經濟戰爭であつたとすれば今度の戰爭は正しく經濟戰爭である。この戰爭は經濟戰爭それのみだ。世界經濟の子だ』(S. 16) この簡潔な言葉はあまりに一面を强調しすぎるが極めて含蓄の深い表現である。彼は世界大戰が經濟戰爭である所以を四つの理由から說明する。第一に戰爭の起因が獨英間の經濟的對立に存するが故に經濟戰爭であるとする。世界戰爭が獨英の經濟的爭覇に基因することは多くの經濟學者の論じたところである。しかし、私見をもつてすれば戰爭の原因が經濟鬪爭にあるとしても、必ずしも戰爭が直ちに經濟戰爭の形態をとるとはいはれない。たゞ世界經濟の場面において平時の經濟競爭が行はるゝ場合、

これを起因とする戰爭が經濟戰爭に傾くことは當然であり、兩者の關聯は後に論ずるごとく、世界經濟の變化から觀察されねばならない。プレンゲのあげる第二の理由は第一の理由と結びつくもので、戰爭の根柢となつてゐるイギリス的精神が町人根性であり、この戰爭が經濟的利益の計慮において行はれてゐるが故に經濟戰爭だとする。

第三の理由はその戰略が兵糧攻め Aushungerungskrieg であることによつて經濟戰爭なりとする。卽ちイギリスの艦隊は自ら戰ふことをしないで、たゞ世界交通を遮斷し、ドイツ貿易を封鎖せんとしてゐる。こゝにプレンゲはトマス・モーアがそのユートピアにおいて、貴重な人命を損じない狡猾な經濟戰爭を說いてゐることを引例し、現在のイギリスの經濟戰爭もまたウトピッシュたるに過ぎないと言ふ。何故ならドイツは決して兵糧攻めにならないからと力調する。しかし事實は經濟戰爭によつてドイツは敗れたのである。

私見をもつてすれば、こゝに述べられる兵糧攻めの戰術が正しく經濟戰爭たる特質をなすものである。たゞ吾國の兵糧攻めといふ言葉はアウスフンゲルングスクリーグにはあてはまらない。兵糧は言ふまでもなく兵の糧食であり、兵の糧食を斷つことによつて戰爭に勝つことを目標とする。しかるに、今日の國際戰爭においては敵國の國民經濟の食糧をはじめ一切の物資の通路を遮斷することが企圖せられる。食糧品は國際法において戰時禁制品とならない。ただ兵糧なるときはこれを禁制することも許されるであらうが、かゝる區別をなすことは困難であり、非戰鬪員の生活物資の一切を世界市場から遮斷せんとするところに近代的經濟戰爭の目標がある。こゝに武力戰爭より經濟戰爭への戰爭形態の移行が極めて重大な意味を有つ。これは武力戰爭が兵と兵との鬪爭であり、非戰鬪員たる双方の國民はこれに聲援を與へる應援團のごとき觀を呈した戰爭から、國民全體が戰鬪員たるの性質を帶び來たり、言ふところの總

體戰爭 totaler Krieg 或は總力戰爭となる重要な原因である。

第四にプレンゲが經濟戰爭たるの理由としてあぐるものは第三に包括さるべきもので、イギリスが自國にあつたドイツ人の私有財産を沒收し、また世界の中立國にあるドイツ人の經濟的地位を奪取しつゝある等の戰法、プレンゲはこれを Geschäftskrieg 商賣戰爭といふ。これは糧道を斷つ戰術の擴大とみるべきもので、經濟戰爭の形態に包含される。この戰法の內にはなほ敵國商品のボイコット、敵國人への支拂の拒否、特許權の侵奪、などが含まれる。

プレンゲはその章を結ぶに當つて言ふ。『こゝに憎みが殘される。吾々は彼等が吾々の生存を破滅せしめ吾々を餓死せしめんとしたことを永久に銘記するであらう。一切のドイツの青年は將來この教へを貫ぬき通すであらう。この教へは吾々が個人として、國民として、外部に對し、或は內部に對してなす行動を將來に亙つて決定するであらう』(523) と悲愴な絕叫がなされてゐる。

しかし、經濟戰爭は相手を海賊と罵り、町人とさげすむでも、嚴然たる死活の戰爭である。

三

プレンゲの問題提出に從つて、先づ他の著者が經濟戰爭を如何に解釋するかをみやう。I. Jessen, Wirtschaftskrieg (Elsters W. d. Volksw.) によれば『經濟戰爭は敵國經濟を一時的或は永久的に麻痺せしめ或は壞滅せしめる目的をもつてする計畫的な敵國經濟への鬪爭である。經濟戰爭は或る特殊な前提の下においては經濟的目的のための經濟的手段をもつてする鬪爭の形態において、一つの獨自な現象として現はれうる。かやうな經濟戰爭は、戰爭狀態なくし

ても考へられる。しかし、普通としては軍事的戰爭の一部分を構成するものであり、從つてその本來の意味においては戰爭の全體的形象のうちにおいてのみ把握されうる。』

こゝで先づ問題となるのは經濟戰爭が軍事的、武力的戰爭狀態、或は國際公法上いふところの戰爭狀態が存在することなくしてありうるかである。エッセンは本來の意味としては經濟戰爭は軍事的戰爭現象の一部現象として把握さるべきものであるとするが、戰爭狀態なき經濟戰爭もまた否定するのではない。これは世界市場における經濟的鬪爭を經濟戰爭といふ言葉をもつて表現することが往々あるからである。しかし、これは本來の經濟戰爭の範圍外におかるべきものである。

H. I. Held, Wirtschaftsblockade (H. d. Staatsw.) では『經濟戰爭の三つの種類が區別されねばならぬ』とする。その第一は『狹義における經濟戰爭であつて屢ば Handelskrieg として表現される。即ち經濟的目的に對する經濟的手段をもつてする鬪爭である』これが平時經濟における國際間の世界市場爭奪戰に當るものである。第二は『經濟的目的に對する軍事的並に其他の手段をもつてする鬪爭としての廣義の經濟戰爭である』第三は『援護的經濟戰爭、即ち軍事的政治的目的に對して經濟的手段をもつてする鬪爭である』

ヘルドの經濟戰爭の區分のうち第一のものはこゝに論外とするが、第二と第三との區別が極めて重要となる。第二の定義では經濟的目的を達成するための軍事的其他の手段による戰爭であり、ブレンゲが世界大戰をもつと英獨經濟爭覇に起因するが故に、これを經濟戰爭なりと言ふ場合も含まれる。戰爭目的が經濟的利益であるが故に直ちにこれを經濟戰爭と言ひえないことは前述せるところである。經濟的目的を達成するために武力戰が開始され、敵の武力を

擊破することによつて勝敗が決せられたとすれば、この戰爭は本來的に經濟戰爭とは言へない。しかし、經濟封鎖の目的のために武力手段が執られるときは經濟戰爭となる。

第三の軍事的、政治的目的に對する經濟的手段をもつてする援護的經濟戰爭は本來の經濟戰爭に含められる。これはブレンゲのいふ戰略として兵糧攻めの戰法に一致する。しかし、經濟戰爭の實體は極めて複雜で、かやうに簡單に把握することをゆるさない。第一、戰爭の目的が經濟的であるか、其他であるかはいま問ふところでないとしても、またヘルドのごとく、『軍事的、政治的目的に對する經濟的手段』と言ふのも明かでない。問題はそこに國交斷絕し、戰爭狀態が存在するとき、その目的は戰爭に勝利をうることであり、このため武力的手段をもつて、或は經濟的手段をもつて敵を窮迫せしめる戰爭形態がとられる。戰爭に勝利を得ることが經濟的利益の達成にあるか否かをいま別の問題とすればヘルドの第三の定義による經濟戰爭、卽ち戰爭の主たる形態を武力戰爭としこれを援護するために行はれる經濟戰爭が最も明確である。たゞ現下の歐洲戰爭にみるごとく、經濟封鎖をもつて敵の國民經濟を窮迫せしめ、それによつて、或は內部よりの攪亂が起ることによつて、戰はずして勝たんとする戰法がとられてくるとき、經濟戰爭が戰爭の主たる形態となり武力戰爭はこれを援護する立場に代ることが可能である。卽ちヘルドの援護的經濟戰爭が反つて主たるものとなり、武力戰爭がこれを援護するかのごとき傾向が現はれつゝある。

ディックスによれば『戰爭は他の手段をもつてする政治の繼續であるといふ有名な言葉はたゞ局限された範圍で經濟戰爭にも適用すべきである。經濟戰爭は戰爭なき時においてもまた行はれる。武器が執られ、外交關係が破棄された時と雖も、これは全く異つた形をとるのでなく、たゞ著しく尖銳化するにすぎない。』(Dix, a. a. O. S. 37) ディック

スもまたプレンゲと同じく、戰爭の起因としての經濟的鬪爭を經濟戰爭とし、これは戰爭狀態において尖銳化するのみであるといふ。彼によれば戰爭への經濟的動因は古代より存在し、既に游牧民族の間には牧草地獲得のために戰爭が行はれた。この牧草地の獲得鬪爭は今日にして正しくドイツに對するイギリスの戰爭であるといふ。『イギリスの經濟戰爭の動因と目標に關しては直接的戰爭目的と間接的戰爭目的とを達成せんとする二つの努力を區別すべきである。直接的には經濟戰爭は武力戰爭を援護し且つ敵の抵抗力を衰弱せしめんとし、間接的には經濟戰爭は遙かにこれを越えて、厄介な經濟競爭を永久的に壓倒し、イギリスの世界經濟的地位を强化せんことを目的とする』(p. 68) もちろん、彼によれば、この二つの目的は經濟戰爭のうちに共在してゐる。たゞ間接的目的のみが目標とせられるときに、武力戰爭とは無關係に平時の經濟鬪爭が繼續せられ、或は强化せられるわけである。この間接的目的のために行はれる經濟戰爭がプレンゲのゲシェフツクリーグと稱するもので戰爭に乘じて敵國の世界市場における經濟的地盤を覆し、戰後においても永久にこれを自己の地盤として確保せんとするものである。

ディックスの言ふ間接目的の經濟戰爭、プレンゲの商賣戰爭、エッセンやヘルドの經濟的目的のために經濟的手段をもつてする狹義の經濟戰爭はほぼ同一のものであり、これは經濟的爭覇が戰爭の重要な起因である場合において極めて重要な經濟戰爭の場面である。しかし、若し交戰國が武力戰爭にその全力を注がねばならなくなると、むしろ第三國の漁夫の利となる。世界大戰が英獨の經濟的爭覇に起因したとしても、その結果は明かに漁夫の利となつたのであり、これが今度の戰爭において恐れられてゐる。從つてこれがまた、できるだけ武力による消耗戰爭を避け、長期的經濟戰爭によつて、自己の經濟的地盤を失はず、むしろ敵國地盤を自己に奪取することが企圖せられる原因であり、

武力戰爭より經濟戰爭へその形態を變轉せしめる一つの動因と言はねばならない。

尙、ヘルドによれば本來の經濟戰爭たる武力戰援護の經濟戰爭と經濟のための經濟戰爭とを分つ規準として前者の諸方策を總稱して『經濟封鎖』たる性質を有するとなす。敵國人との商業上の契約並に支拂の禁止や、非戰鬪員たる個人にまで擴張された『敵』概念や、敵性商社の取引監視や、黑色表（ブラックリスト）、灰色表、白色表等による中立國敵性商社の取引妨害や、敵國人財產の押收などは『これらの方策自體並にその效果が經濟封鎖の存續期間だけに限定せられる限り、經濟封鎖の方策たるものである』これらの諸方策がディックスのいふ直接的經濟戰爭と間接的經濟戰爭とに區別されることは事實上困難であつて、兩者は交錯してゐる。例へば自國にある敵國人の財產を沒收することは單に敵國を經濟的に封鎖する以上に、さらに、平和の後においても、それだけ敵の經濟的地盤を喪失せしめる目的をもつてゐるのである。

E. Schuster u. H. Wehberg, Der Wirtschaftskrieg (England), 1917. に附した Harms の序文にも大體に同じやうな區別がなされてゐる。『この經濟戰爭は二重の樣相をもつてゐる。經濟戰爭は本來的にまた主として敵を軍事的に壓倒するために奉仕するものである。こゝにイギリスは數百年間に亙る實踐に結びつくことができ、從つて直ちに決定的な政策實踐に移行することができたのである。その目的はドイツの世界經濟的關係を完全に破壞することによつて、ドイツの戰爭技術的、戰爭經濟的抵抗力を麻痺せしめるにあつた。』『經濟戰爭の第二の側面におけるイギリスの努力は全く異れるものであつて、戰略的目的設定にかゝはるところなく、ドイツの經濟生活に對して長年月に亙つて效力ある損害を與へ、毫も再び經濟競爭を挑み能はしめざることを目的とした。この目的に向けられた諸方策並に努

力の總體のうちには所謂貿易戰 Handelskrieg も含まれ、從つてこの貿易戰は經濟戰爭の一部分たるものである。個々の場合においては恐らく兩者は嚴密に區分しえない。即ち戰爭の期間においては貿易戰の若干の方策は同時に軍事的目的に奉仕するものであり、また反對に戰爭經濟的諸方策は戰時期間を越えて永くその效力を及ぼすものだからである』(S. VI-VII)

A. Lenz, Der Wirtschaftskampf der Völker und seine internationale Regelung, 1920. においてレンツは經濟戰爭を經濟的帝國主義の發現として觀察する。『經濟的帝國主義は或る國民經濟が世界經濟に對して不斷に增大せる分前を獲得せんとすることである」(S. 31) とし、列强の世界經濟に對する增大しつゝある分前の欲求は平和的或は戰爭的手段に訴へるのである。平和的手段は平時における經濟的鬪爭であるが、『經濟的競爭の戰爭的手段としては自由な經濟的競爭に代つて强權を用ふる一切の手段である。これら手段はさらに軍事的强權と經濟的强權とに分れる。經濟的帝國主義に奉仕する軍事的强權は武力的戰爭である』『經濟的强權は經濟的權力手段の展開によつて實施せらるゝ個個の强制策である。』(S. 37) こゝに言ふ經濟的强權は單に戰時において行はれる手段のみでなく、關稅戰爭などの敵對的貿易政策が包括せられる。經濟戰爭と呼ばれる場合はレンツによれば戰時の際にとられる經濟的强權の手段である。『經濟的帝國主義の强權的方法は戰爭勃發後、狹義の經濟戰爭に向つて繼續的な技術的成長をなした』『この經濟戰爭は……敵の國民經濟を一切の貿易交通より遮斷することに窮局の目的がおかれる。經濟戰爭は法律的並に軍事的權力手段を用ふるのである。』(S. 47)

森武夫博士『戰時統制經濟論』(昭和八年) においては『世界戰爭中英獨兩國の間に深刻なる經濟戰爭が行はれたこ

とは曩に述べたところであるが、將來戰爭に於ても戰爭手段として敵國戰鬪力の直接破壞を目的とする武力戰爭の外に經濟上の手段に依る戰爭卽ち經濟戰爭なるものが行はれるとしなければならない。抑々現代諸强國は平時より既に激烈な「經濟戰」を展開して居り、其の結果が戰爭惹起の主要原因を爲すことは既述の如くである。此の戰爭手段としては平和的手段、例へば資源の豐富、企業經營の合理化等純粹なる經濟的條件の優越に依る外、多くの政治的手段卽ち獨占關稅、ダンピング、輸出及海運の保護、輸入の抑制、原料獨占、投資保障等各種の政策が用ひられ屢々個々の軍事的活動をさへ要求してゐるのである。故に一度戰端が開始されると、此の平時の經濟戰は眞の經濟戰爭と化するのである』(三九頁)その最も有效なる經濟戰爭の手段として經濟封鎖があげられる。

小穴毅氏『獨逸國防經濟論』(昭和十三年)においては『經濟戰爭は敵國の國民經濟を破壞し、或は少くとも出來るだけ長期に亙つて傷けることを直接の目的とした所の、經濟的並に軍事的手段による戰鬪であるといふことが出來よう』(二四頁)

經濟戰爭に對する諸著者の定義的把握は若干の相違はあるが、大體において共通的に一致するものがみられる。いまこゝに私見による定義を構成することを止め、後論においてその實體を明にすることゝする。

四

世界戰爭における經濟戰爭の文獻の多くはドイツ側よりイギリスの執つた諸手段を究明し批判するものである。イギリス以外の諸國の執つた經濟戰爭的諸方策の研究文獻を二三紹介すれば、第一にドイツにおける報復的經濟戰爭の

研究としては F. Lenz u. E. Schmidt, Die deutschen Vergeltungs-Massnahmen im Wirtschaftskrieg (Bonner Staatsw. Untersuchungen Heft 9), 1924. がある。これは十九世紀において確立され、また一九〇七年のヘーグ條約によつて認められた戰時における敵國人私權の不可侵の原則が大戰の勃發とともにイギリスによつて破棄され、イギリス並にその支配諸國に滯在する敵國人の私權の壓迫が經濟戰爭の手段として用ひらるゝにいたつたに對して、ドイツ側もこれに對する報復的手段をとつたのである。この書はかやうなドイツ國內の法律的諸方策の研究であり、其他の外交的、軍事的な經濟戰爭の手段に觸れてゐない。

次にロシアにおける經濟戰爭の研究として B. B. E. Nolde, Russia in the Economic War, 1928. がある。本書によればロシアは經濟戰爭に對して最も不用意に參戰した國であり、ドイツ側の私權への侵害や、バルチック海の封鎖などによつて、やうやく組織的な經濟戰爭を自覺したのであつた。イギリスはドイツに、ドイツはロシアに經濟戰爭を自覺せしめたといへる。今度の歐洲戰爭の勃發前夜、ドイツがロシアと提携するにいたつた經濟戰爭上の根據については本書が參考資料となさるべきものであらう。

次に世界大戰當時の日本の執つた經濟戰爭の手段については K. L. Ulrich, Der Wirtschaftskrieg (Japan), 1917. がある。當時我國は在住ドイツ人に對して若干の制限を加へたのであるが、私有財產の沒收や取引の禁止などを行ふことなく、またイギリスのブラックリストによる取引監視も吾國では有效には行はれてゐない。たゞ靑島と南洋諸島の日本による占據が一つの經濟戰爭的意義を有してゐる。本書の大部は大戰中における日本產業發展の叙述に向けられ、事實が然りしごとく經濟戰爭に關しては豐富な資料ではない。

經濟戰爭は交戰國相互の貿易關係が斷絶せられることのうちにも內在するものであり、相互貿易の中絶によつていづれがより大なる打擊を受けるかは產業別に研究されねばならない問題である。その一つの例としてドイツ側から A. Hesse u. H. Grossmann の編輯にかゝる Englands Handelskrieg und die Chemische Industrie, 1915. がある。化學工業におけるドイツの優位はその貿易遮斷によつてイギリスにも相當の打擊を與へたものであり、『戰爭は必然的に双方國の貿易關聯に重大な損傷を與へざるを得ない。卽ち「エコノミスト」が旣に一九一四年八月に極めて正當に認めたごとく、ドイツの損害はイギリスの利益でなく、またイギリスの損害でもある。もつと冷靜な時がくれば、幸にこの言葉の正當なることがイギリスにおいても一般に是認せられるであらう』(S. 12) 確かに染料工業のごときにおいてはドイツにもイギリスにも双方の損害となつた。經濟戰爭によつて相手を窮迫せしめるためには、また自らも損害を受けねばならない。もちろんこれは武力戰爭においても同樣で、自ら損害なくして相手を擊破しえないのである。しかしエッセンはこれを經濟戰爭の特殊性だとする。『經濟戰爭の一つの特殊性はその副作用にある。それは世界の經濟的關聯性から生ずるものであり、これは必然的にまた軍事的敵國との經濟的關聯性を意味する。この關聯性が切斷せらるゝとき、そこに成立する損害を敵國にのみ局限することは可能でない。經濟戰爭の各の方策は現在においてのみならず、將來において直接間接に攻擊者に向つて反作用するのである。從つて經濟戰爭は正に兩刃の劍のごときものであり、殆どあらゆる場合においてまた攻擊者自身に向けらるゝものだといふことになる』(Wirtschaftskrieg Ersters W. d. Volksw.)

經濟戰爭が兩刃の劍であることは單に交戰國双方の貿易關聯の遮斷によるのみでなく、中立國をして敵國との通商

を遮斷せしめる場合においてもそうである。中立國を通じて取引せられた貿易が經濟戰爭によつて遮斷せられ、攻擊國の側にも輸入し得ない事情が成立するからである。

しかるにも不拘、經濟戰爭は交戰國の貿易遮斷はもちろん、中立國と敵國との貿易關聯を遮斷する方向に進まざるを得ない。しからざれば相手を世界經濟の關聯性から切り離すことができないのである。『イギリスがドイツに對して行つてゐる經濟戰爭の鎖の一環は中立國の拘束を形成する。イギリスはこゝにおいて「自分と一緒でないものは自分に對抗するものである」との立場に立つてゐる。その結果として各中立國はイギリスの經濟戰爭に奉仕すべく强要せられる。中立國が心よくこれに應じない時にはイギリスは强權を適用して何等の躊躇するところがない。各中立國はこれに應ぜざるを得ず、イギリスは砂糖と鞭とをもつてその目的を達成せんと試みてゐる。かくして今や多少の程度においてイギリスの獨裁に惱まされない中立國はもはや存在しないやうな情勢となつてゐる。イギリス人は「支配民族」として自惚れ、中立國人は奴隷のごとく取扱はれてゐる。(C. Jöhlinger, Der Britische Wirtschaftskrieg und seine Methode, 1918. S. 217)

イギリスがかくのごとく中立諸國を支配しえたのは言ふまでもなくその制海權によるものであり、これによつて中立國の海外貿易と船舶とを脅かすことができたのである。これは特に北歐諸國についてあてはまるところである。イギリスが如何に中立國とドイツとの貿易を遮斷するためには巧妙な貿易間諜網を設け、ドイツとの商品並に金融取引を監視し、壓迫したかはイエーリンガーやシュスターの書に詳かである。今度のドイツの北歐進駐が往年のイギリス經濟作戰に顧みるところあるのは明かである。

いまだアメリカが參戰しない前に中立國としてのアメリカ側から書かれたものに、E.J. Clapp, Economic Aspects of the War, 1915. がある。國際法の立場から中立國の權利を力調してゐる。『勃發の最初からこの戰爭は陸海軍の活動の範圍を越えて進行した。この戰爭は「經濟戰爭」となつたのである。卽ち中立國と交戰國との取引の流れ、さらに中立國間の取引の流れさへも遮斷せんとする過程にまで進んだ。この目的は遮斷された交戰國から軍事上、産業上、また市民生活上の必要品を奪ひ、かくして敵國をして戰爭を終結せしめるに充分な「壓迫」を加へんとするにある。しかし、この種の經濟戰爭はまた中立國に對する經濟戰爭である。それは攻擊せられてゐる交戰國に對すると同樣の壓迫が、むしろより大なる壓迫さへもが中立國に加へられるからである。おそらく、交戰國は中立國が交戰國市場に代用品を發見しうるよりも、もつと容易に中立國の産物に代用品を發見し、その需要を擴大することもできるであらう。一切の取引には二つの當事者がある。彼等双方に打擊を與へることなくして、その取引を遮斷することは不可能である。』(p. 45)

この書において、彼等双方に打擊を與へることなくして、その取引を遮斷しえないといふのはエッセンの「兩刃の劍」の意味とやゝ異つてゐる。エッセンの場合は經濟戰爭における攻擊者もまた相手と共に被害者たらざるを得ないといふのであるが、クラップの場合は交戰國と共に中立國も被害者となるといふ意味であり、イギリスのドイツ封鎖政策に對して抗議してゐるわけである。イギリスが一九一五年三月一日にドイツ封鎖を宣言したとき以後、アメリカの棉花などのドイツへの輸出が遮斷せられ、その時まで可能であつたドイツ品の輸入も不可能となつたのである。かくしてアメリカは中立を維持するとしてもドイツとの貿易が不可能となり、それによつて利することを得ず、英佛の

側に參戰して交戰國となるとも、それ以上の經濟的打擊を受けないことゝなつたのである。

中立國はかくして、經濟戰爭のために事實上交戰國と同樣の立場に立たざるを得なくなる。これは今日の經濟戰爭の最も重要な特質をなすものである。

五

以上は世界大戰の經驗から生れた經濟戰爭に關する書物で通覽し得たもののみにつき、經濟戰爭の特質を究明する立場から若干を引用し、經濟戰爭の手段方策の詳細なる問題には一切觸れなかつたのである。いま以上の紹介を總括する前に、經濟戰爭が世界大戰において、また今度の歐洲戰爭において何故に一層の重大性をもつにいたつたかを歷史的に考察しなければならない。しかし、この問題については、詳細な戰史を繙くことなくしては解答されないであらう。ただ、こゝではイエーリンガーの書によつてイギリスの經濟戰爭を回顧してみる。（イエーリンガーの前揭書の外に尙、同じ著者の Weltwirtschaftliche Ursachen des Krieges, 1916. がある）

イギリスが過去數世紀の間につぎ〳〵に世界の覇者であつたスペイン、オランダ並にフランスを破碎し得たのは、その起因が經濟的爭覇にあると共に、またその經濟手段として經濟戰爭を援用したによる。從つてイギリスは世界大戰においても同樣の起因から同樣の手段をもつてドイツに立向つたわけである。イギリスの最も輝しい經濟戰爭はクロムウェルの航海條令（一六五一年）であり、これによつてオランダの通過貿易とその海運業に大打擊を與へた。これは結局、英蘭の武力戰爭によつて確定的となつたわけである。しかし、私見ではこの航海條件は經濟的爭覇のために

とられた手段であつて、武力戰爭の援護的意味は副次的にしか考へられない。もちろん航海條令によつてオランダの貿易に打擊を與へたことは、それだけ、その武力的抵抗力を削減することであるが、條令の發布後一年ならずしてオランダ戰爭が起つてゐる。この約三ケ年に亙るオランダ戰爭中にイギリスがオランダ封鎖のために如何なる經濟戰略をとつたか、いまこれを詳かにする餘裕をもたない。この戰爭が海軍力の決戰によつて勝敗が決せられた背後にオランダの經濟的窮迫が如何なる重要性をもつてこの戰爭を支配したかが研究されねばならぬ。かくして始めて當時における經濟戰爭の重要度を測定しうるであらう。

イエーリンガーは W. H. Edwards, Englische Expansion und deutsche Durchdringung als Faktoren in Welthandel. Jena, 1916. を引用することによつてイギリスとオランダ、或はフランスとの經濟的爭覇が戰爭の起因となつてゐることを明かにする。しかし、その戰爭が武力戰爭の外に經濟戰爭によつて如何にイギリスが優勢となりえたかを充分述べてゐない憾みがある。たゞイギリスが戰ふ毎に相手國の植民地を占領し、相手に經濟的打擊を與へ、自ら經濟的に利する立場に立つたことは經濟戰爭の方略といふことができる。特にフランスとの長期に亙る戰爭においてそうであつた。ナポレオン戰爭の時にイギリスのピットはフランスに對して封鎖令（一七九二年）を出し、一八〇六年にはナポレオンの大陸封鎖令が發せられてゐる。しかし、イギリスのフランス封鎖も、ナポレオンのイギリス封鎖もそれが充分の威力をもつたとは思はれない。そこに當時と今日との間に大きな世界經濟の構造變動が起つてゐると言はねばならない。

イギリスの近代における戰爭が多くはその經濟的發展のために行はれ、ブレンゲの言ふ商賣戰爭たるの性質をもつ

ことは確かであり、世界大戰も今度の歐洲戰爭もそこに大きな動因がある。從つて經濟戰爭が敵の武力的戰爭力を弱めることに役立つとともに、またこの經濟的目的を達成しうるならば、イギリスとしてはその海軍力を損傷することなく、經濟戰爭に主力を注がんとするに相違ない。

今日、經濟戰爭を積極的に遂行するには强大な海軍力なくしては不可能である。かくして、イギリスの海軍はオランダ戰爭以來、世界の海に君臨してゐるが、その主目的は敵海軍を擊破するよりも先づ經濟戰爭の手段により、敵國の世界貿易を遮斷することに向けられつゝある。

要約するに經濟戰爭は新大陸の發見以來、世界諸國の經濟的爭覇に伴つて、その重要さが增大してゐる。これは戰爭の主目的が經濟的利益の確保にあるがために、經濟戰爭の手段によることは、一方敵の武力を弱めるとともに、同時に戰爭目的たる經濟的利益を確保しうる一石二鳥の長所をもつためである。戰爭それ自體は消耗であり、經濟的に人口的に莫大な損失であることはいふまでもない。かゝる經濟的、人口的否定を通過することなくして敵を壓服しうる方策ありとすれば、自らかゝる戰爭形態がとられることゝなる。しかして、これを可能ならしめるものは世界經濟の成立に外ならない。

世界經濟關係の成立の基調をなすものは國際的分業化或は筆者のいふ世界經濟の異質化である。この異質化は世界經濟的聯關の集團的一環たる國民經濟の自給自足性を失はしめ、食糧についても、軍需品並に民需品の原料についても貿易に依存せざるを得なくならしめたのである。從つて一國民經濟が世界經濟より遮斷せられることはその國民經濟の存亡に關する重大問題とならざるを得ない。このことには尙、他方に武器の發達と大規模化とが考へられねばな

らない。世界經濟的關係の成立は同時に國防とその武器とが同じ大さにおいて擴大され精鋭化されることを必要とし、そのいよ〳〵增大する原料は一國民經濟において完全に確保されえなくなつてゐる。かくして民需、軍需ともにその供給を世界市場に求めねばならない。戰時において敵國をこの關聯より遮斷し、自己に敵の原料市場並に販賣市場を奪取せんとする經濟戰爭が最も重要な作戰とならざるを得ない。

世界經濟の異質化は後進國の工業化によつて少くとも十九世紀の後半より同質化の傾向に進んでゐる。この同質化は英獨間におけるごとく經濟的鬪爭を惹起し、戰爭への起因となる。しかし、この同質的反撥は工業國の間に起るものであり、原料國との異質性は依然として存在し、これから遮斷せらるゝ危險は毫も減じない。しかし、近時における濟經ブロックへの動向の一つの重要な起因は戰時における異質的孤立の危險を排除するにある。

世界大戰のとき、ドイツは經濟封鎖を受けたゝめに期せずしてフィヒテの『封鎖的商業國家』となつた。しかし、世界的規模に工業化したドイツが封鎖國家として存立しえないことは明かである。封鎖國家として存立しうるためには少くとも中歐に大ブロックを建設しなくてはならない。これはこの戰爭前からドイツの企圖せるところであつた。

戰前においてアウタルキーを可能ならしめるブロックが成立してゐないとすれば、戰時において中立國は交戰國のいづれかのブロックに參加することを餘儀なくされる。經濟的封鎖を目的とする經濟戰爭において中立國は存立し得ざるにいたる。かくして經濟戰爭は本來に世界戰爭たる性質を內在してゐる。經濟戰爭は外延的に世界諸國の全對戰爭となる可能性をもつとともに、前述するごとく內包的には國民の總力戰爭たらざるを得ない。經濟戰爭の目標は單に兵力を弱めるといふのでなく、國民經濟全體を麻痺せしめ、その總力戰爭を不可能ならしめんとするにあるからで

ある。こゝに防禦的經濟戰爭の廣大な陣營が開かれる。

最後に、戰爭の主形態が武力戰爭より經濟戰爭に移行しきたつてゐることを今次の歐洲戰爭の特徴とすることに誤りなしとすれば、その原因は第一に武器の發達が武力戰爭を阻止しつゝあること、第二に武力戰爭は交戰國の世界經濟的地盤を失はしむるにいたることなどであり、兵力と武器の損傷をできるだけ避けつゝ、經濟戰爭の壓迫によつて國民經濟の總力戰陣營に動搖をきたさしめんとしつゝある所以である。しかし、もちろん、いつかは武力的決戰が行はれるであらう。けれども、その時における經濟戰爭の陣營如何がその勝敗を決定的ならしめるものであらう。

（一五、四、一四）

（追記、本篇には尙、二三の重要な文獻を逸してゐるが、書了後に讀んだ A. Dix, Weltwirtschaftskrieg, 1914. は四五頁の小册子であるが、世界大戰勃發直後に出版せられ、經濟戰爭の重大性を自覺せる書として價値を認めらるべきものである。）